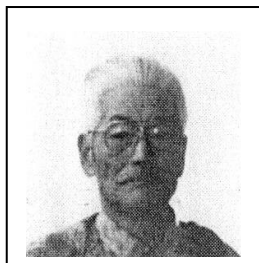


Titibu601

秩父平成10年7月 60号

## 満洲慰霊の旅

直井 孝三郎  
予科12-8  
航空17-4



満洲は、明治から終戦までの間、日本人の血と汗と涙が染みついた所だ。私は、かねてからここに線香を手向けに行きたいと考えていた。そのような思いが叶い、平成9年9月4日から10日の1週間予科の区隊長廣野さん（旧姓長田）のご令息、同区隊の伊藤保と私の3名で満洲を旅行する機会を得た。

目的地は、廣野さんが予科赴任前の青春時代の数年間を過ごされた満洲の北東隅にある虎林と虎頭。いってみれば慰霊の旅であり、観光的な意図はなかった。

この時期の満洲は暑くも寒くもない、ベストシーズンであった。

### ■旅程

#### <第1行程：成田—大連>

大連で一泊する。この都市は外国との接点であるため、垢抜けした都市であるといえよう。人口500万人。

#### <第2行程：大連—ハルピン>

翌日、空路ハルピンへ移動し、ここで一泊する。ハルピンは大連よりさらに大都市で、人口的600万人という。翌日、松花江岸のスターリン公園を散歩し、船で松花江を遊覧した後、市街や地下街を見物した。地下街ではファッションショーなども催されており、中国の改革開放の進歩を感じさせられた。昔の花園小学校は、今は空軍の司令部になっている由。

#### <第3行程：ハルピン—虎林>

夕刻、ハルピン東駅から寝台車に乗って730km東方の虎林を目指す。約18時間

かかって、翌日の午前に到着した。

#### <第4行程：最終目的地の虎林、虎頭>

虎林に到着してすぐ、昔の日本軍の施設跡を尋ねた。昔の部隊本部、宿舎、病院などの煉瓦造りの施設は辛うじて残っているが、木造の施設は跡形もない。

虎頭は、虎林から更に北東方へ60kmの地にあり、ウスリー川（黒竜江、アムール川の支流）を隔てて、ロシア領を臨む国境にある。虎林から虎頭の間は、かつて旧関東軍が敷設した軍用鉄道があったが、終戦後ソ進に接收され、今は旧路線跡が幅8m程の国道になっている。国道とは言っても舗装道路ではなく、土をたたき固めた道である。いざという時は、軍用道路になるのだろうと思われる。

この道を四駆の中国製車で1時間余り走ったところで、検問所にさしかかった。そこで許可証を持っていないとの理由で、オフリミットを喰らった。やむを得ず虎林に舞い戻り、ここで一泊する。翌朝、許可手続きを済ませて再び虎頭へ。

北上する幹線国道から東北に分岐する道路沿いの、ウスリー川を見下ろす台地上に虎頭の集落があった。台地上には虎頭賓館というホテルがある。そこからウスリー河畔に降りる途中に旧関東軍が構築した地下要塞跡があり、5元（日本円で約80円）で見学できる。かつてはこの辺一帯は大要塞地帯で、昭和20年8月8日、満洲に進攻してきたソ進軍と日本軍との間で、18日間戦闘が行われた。この要塞の裏手で線香を手向け、合掌した。この後、遊覧船でウスリー川を遡航してみる。

ウスリー川の中央部が、中国とロシアとの国境になっている。対岸はロシア領イマン市で、ロシア側の監視塔が遠望できる。こちら岸には中国側の監視塔がある。近くの山林の中に、平成3年に開園された「日中虎頭友好公園」があり、記念碑が建っている。虎頭は一見平和そうな集落で、道路沿いの露店に近いような市場では西瓜や野菜、川魚等を商っていたし、その向かいの小学校の校庭では、球技の授業中であった。しかし、道路添いに軍の施設らしい建物が見られたのは、やはり、国境の集落という感を受けた。かつては、中・ソ間の軍事紛

争もあつたらしい。

虎林、虎頭と「虎」の付く地名は、この辺りに有名なシベリア虎（別名：アムール虎）が棲息していたことに由来するものと思われる。このアムール虎の絶滅を防ぐため「虎林園」という飼育場が作られているとのこと。

#### <第5行程：虎頭―虎林―牡丹江>

即日、虎頭から虎林に戻り、虎林から寝台列車で8時間余りかけて、牡丹江に移動する。牡丹江の人口は約60万人という。終戦時の人口は約6万人で、そのうちの1万人ぐらいが日本人だったそうだ。

#### <第6行程：牡丹江―北京>

即日、牡丹江から飛行機で北京へ移動する。搭乗時間は約2時間。中国は広いと改めて感じる。北京で一泊する。

#### <第7行程：北京―成田>

帰国の途につく。

### ■満洲の印象

一週間で満洲のほんの片隅を走り抜けたが、その印象をいくつか挙げてみる。

#### 1.「満洲」の昔と今

その昔、満洲というと、果てしない平原と地平線、赤い夕日、高粱畑、馬車などを連想したものだった。しかし、確かに満洲は広いが、地平には木が植栽されており、モンゴル平原の地平などとは趣を異にする。ここでは残念ながら、地平に沈む赤い夕日にはお目にかかれなかった。稲作が広く行われるようになり、今では高粱を目にするのは難しいという。

馬車は今でも使われているが、予想以上に自動車や農耕機械を見かける。やはり戦後の50年の変化は大きいようである。

#### 2.「北大荒」の昔と今

その昔、虎林や虎頭の付近一帯は人も馬も飲み込んでしまうような湿地で、「北大荒（北辺の大いなる荒れ地）」と言われらしい。戦後、中共政府の施策によって開発が進み、大穀倉地帯に変わったとことである。稲作は、朝鮮族の人達によって進められたといわれる。しかし私は、それ以前に満蒙開拓の名でこの地に展

開していた日本人たちの、下地造りがあったのではないかと考える。なぜなら、湿地を水田化するのは日本人のお家芸であったからである。

### 3.少女の微笑

虎林や虎頭のレストランのウェイトレスの少女は、概ね見目よしで、恥じらいの微笑みが魅力的だった。器量よしなのは白人の血が混じっているせいかと考えさせられた。大都市部に近づくにつれてウェイトレスの態度が素っ気なくなるのは、商売ずれしているせいかもしれない。

### 4.現地の人達

ハルピン―虎林の列車の中や虎林の郊外では、現地の人達がもの珍しそうに集まってきたのは、色々アドバイスをしてくれた。日本人に対する反感が特に感じられなかったのは、優秀なガイドさんのおかげだったかもしれない。

### 5.人口の都市集中化

清朝末期の中国の人口は4億入で、現在の人口は12億人あまりと言われるから、増加率は約3倍である。一方、満洲の都市部の人口は、この50年間で約10倍にも増加したらしい。中国の平均月収は日本円で約8千円だという。辺地と都市部との間の経済格差が、都市部への人口集中化をもたらししているのかもしれないと思った。